

児童の生活状況からみた体力と運動意識の関連 —島嶼部の小学生に着目して—

松尾 晋典*・若林 紀乃**・大原 美香**・
伊藤 数馬*・時津 啓*・長沼 貴美**

Relationship between physical abilities and physical motivations among elementary school pupils of an island community

Shinsuke Matsuo Sumino Wakabayashi Mika Oohara,
Kazuma Ito Kei Tokitsu and Takami Naganuma

It is generally regarded that islander pupils are more physically developed than urbanized ones which tendency was also proved by the census performed in this study. Factors that may stimulate physical developments of island pupils were hypothetically ascribed to: 1) motivations for physical activities stimulated by islander lifestyles or 2) lifestyles despite motivations. To test the hypothesis we have conducted a questionnaire survey to quantify i.e. to scale motivations (with reference to lifestyles) as well as a physical ability census for elementary school pupils of an island-based elementary school Hiroshima Prefecture Japan. The census and questionnaire showed that no clear positive relationships between physical abilities and motivations scales as reported in previous studies. The results may suggest two alternate hypotheses that: 1) physical abilities and motivation scales are inter-reversely correlated particularly for elder pupils; or 2) islander less-convenient lifestyles force children to develop physically irrespective of willingness to physical load in their daily lives. The latter is supported by the observation that physical abilities are improved with the increase in school year grades i.e. the duration of time spent in the islander community.

Key Words (キーワード)

elementary school pupils (児童), island community (島嶼部), lifestyles (生活状況)
physical abilities (運動意識), physical motivations (体力・運動能力)

I. 緒 言

体力運動能力報告書(2002)によると、現代の若年層は、親の世代にあたる30年前の子供より、体格において著しく上回っている反面、体力において下回っていることが指摘されている¹⁾。また10年前と比較するとほとんどの学年で調査以来ほぼ最低値を示しており、体格は大きくなってい

るが、体力・運動能力の各種要素はほぼ低下していることが報告されている²⁾。

特に乳幼児期から児童期にかけては歩・走・跳・投をはじめとする基本的運動技能とともに、心理的な面においても発達をとげる³⁾。現代の子どもは、発育発達が盛んな時期に身心の正常な発達にとって十分な遊び(運動刺激)が必要だったのに関わらず、それらが不足している状態で成長し

*広島文化学園大学 社会情報学部 (Faculty of Social information Science Hiroshima Bunka Gakuen University)

**広島文化学園大学 看護学部 (Faculty of Nursing Hiroshima Bunka Gakuen University)

てきたと言われている 4)。このような子どもたちの体力の低下が問題視されつつも、一向に改善が進んでいないのが現状である。

これまでに児童の体力に関わる研究として、日本を含む先進国の食生活が生活習慣病を引き起こす食の欧米化へと大きく変化していることから、食生活と生活習慣病の関係を見たもの⁵⁾や、食生活に関する実態と保護者の意識との関連を検討したもの⁶⁾や幼児の身体発達を食生活と家庭環境から見たもの⁷⁾など、食生活の実態と関連する研究が数多く検討されてきた。

しかし、子どもたちは食行動以外にも自らの体力を自然に鍛える生活上の運動や、日常の中での運動（遊び）を行っている。安部⁸⁾は、現代の生活や社会環境の変化は、子どもの運動やあそびの質を大きく変化させ、身体活動量を低下させる原因であることを報告していることから、生活・運動習慣が、現代の子どもの体力低下に関与していることが示唆される。また、その運動行動は子ども自身の運動意識が原動力となり営まれ、日常の中で自然に体力として蓄積されている。食行動のみならず、生活状況・遊び状況と運動意識から体力強化に寄与する要因を検討する必要があるといえよう。

ところで、児童の運動に対する意識についてはこれまでどのような研究がなされてきたのだろうか。2000 年以降、体育や運動会といった学校の運動活動と児童の運動有能感との関連について多くの研究がなされてきた⁹⁾。おそらく、1998 年の教育課程審議会の趣旨をふまえた小学校学習指導要領の体育科改訂の方針に、「運動に親しみ運動を好きになること」が強調されたことによって、運動に自ら取り組む児童、運動に取り組む自分を好きになる児童を育てようとしていることに端を発していると思われる。武田¹⁰⁾によれば、児童の運動有能感を高めることはその後の体力の向上につながるという。確かに、運動に対する意識の原点として、自らが運動に取り組める人間であることを自覚すること、つまり運動有能感を高めることは重要な体力向上の起点になるといえよう。

しかし、幼児期の運動意識の研究は活動欲求や身体活動評価にまで範囲を広げ詳細な検討がなされはじめているのに対し、児童期の研究は運動有能感に偏っていることに注意しなければならない。鈴木ら¹¹⁾は、幼児の身体活動量の増強と活動意欲形成のための介入効果を確かめる指標として「子どもアクティビティ尺度」を開発している。体育という学習として、定期的に運動に取り組むようになる児童において、運動有能感のみならず運動活動へ向かう意欲そのものへ着目し体力の向上との関連を詳細に検討することは、児童の運動活動のスタート学習に重要な示唆を与えられられる。

かつて安孫子^{12) 13) 14)}は、運動への自己認知と実践からのフィードバックの循環の重要性を示唆している。活動意欲を駆り立て、運動実践から自己認知の形成にいたるまでのメカニズムを明らかにすることは、単なる体力の向上だけでなく、生涯にわたる運動意識と体力の向上に向けてその術の考案につながるといえるだろう。

これまでの研究では、離島、団地、都市の幼児の体力・運動能力の地域差を指摘したもの¹⁵⁾は見られるが、離島や島嶼部の児童における生活状況や運動意識と体力・運動能力との関連を詳細に検討した研究は少なく、その実態は未だ不明瞭な状態にある。交通機関が発展した現代において、日常の生活状況には必ずしも違いがあるとは言えない。生活に特殊性が予想される島嶼部において、児童がどのような生活をおくり、その生活が体力や運動意識にどのように関連しているのか、その実態を詳細に分析する必要がある。

そこで本研究は、島嶼部の児童の生活・運動習慣、運動意識に関連性があるかを探ることを目的とする。その際、日常において自ら体を動かそうとする気持ちであるアクティビティ意識を自己評定し、新体力テストで測定された基礎体力項目との関連を検討することで、活動意欲と体力との関係を詳細に探る。

II. 研究方法

1. 対象者

対象は広島県島嶼部のS小学校1～6年生の児童47名（男子23名、女子24名）であった。表1は児童数を学年別・男女別に分類したものである。対象者には事前に調査および測定の主旨を説明し、プライバシーの保護や成績には無関係であることなどを伝え、同意を得た。

2. 体力および運動能力の測定

体力の測定項目は、6～12歳対象の文部科学省準拠新体力テストを採用し、1) 筋力:握力, 2) 筋持久力:上体起こし, 3) 柔軟性:長座体前屈, 4) 敏捷性:反復横とび, 5) 全身持久性:20m シャトルラン, 6) スピード(走力):50m 走, 7) 筋パワー(跳力):立ち幅跳び, 8) 巧緻性・筋パワー(投力):ソフトボール投げの計8項目を測定した。各項目における測定方法は、健康・体力づくり事業財団の「新体力テスト」¹⁶⁾に準拠して行った。

3. 日常生活活動の調査

1～6年生の児童および保護者を対象に、日常生活活動の調査を実施した。日常生活活動の測定として、学年や性別を含むフェイスシートを作成した。エレベーターや階段使用の有無など住まいの形態や通学手段と所要時間を記入してもらい、帰宅後や休日における運動や遊びの状況を、よくする・時々する・少しする・まったくしない、の4件法から回答してもらった。そして、学校以外での運動やスポーツクラブ活動状況（加入の有無

と頻度）を記入してもらった。このアンケート内容に関しては低学年用、中学年用、高学年用と各学年の理解力に応じた語彙とした。また、アクティビティ意識の測定として、鈴木ら¹¹⁾が幼児の身体活動評価尺度として保育者向けに作成した15項目からなる「子どもアクティビティ尺度」を使用した。使用にあたっては本人が回答できる形に変え、よくする・時々する・少しする・まったくしない、の4件法から回答してもらった。

4. 統計処理

基本情報の分析については記述統計量をもとに単純集計にて算出した。アクティビティ尺度（15項目）は4段階評定（よくする＝4点～まったくしない＝1点）より得点を算出した。体力測定の分析については、各種目の成績ごとに出された得点（1点～10点）を単純集計した。体力総合得点と子どもたちの日常生活における関係はスピアマンの相関係数にて算出した。さらに詳細な検討をおこなうために、習い事の有無と体力との関連、アクティビティ尺度の高群・低群と体力との関連を、それぞれについてマンホイットニーのU検定を行った。

5. 欠損値の処理

体力測定項目に欠損値があった児童6名（3年男子1名、3年女子2名、4年男子1名、6年男子1名、6年女子1名）については、体力測定の分析から除外した。

表1 調査対象

| | 1年生 | 2年生 | 3年生 | 4年生 | 5年生 | 6年生 | 合計 |
|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|----|
| 男子 | 1 | 4 | 5 | 5 | 1 | 7 | 23 |
| 女子 | 6 | 1 | 4 | 2 | 8 | 4 | 24 |
| 合計 | 7 | 5 | 9 | 7 | 8 | 11 | 47 |

Ⅲ. 結 果

1. 新体力テストの測定

表2に、新体力テストにおける島嶼部児童の測定結果と全国小学生児童および広島県小学生児童の平均値との比較を示した。柔軟性を指標とした長座体前屈の測定値は、1年生:31.71 ± 3.40cm, 2年生:32.40 ± 3.36cm, 3年生:35.67 ± 2.42cm, 4年生:34.83 ± 11.82cm, 5年生:37.75 ± 5.06cm, 6年生:36.67 ± 11.68cmであり、1～5年生の測定値において全国および広島県の平均値を上回り、6年生の測定値が広島県の平均値を上回る結果を示した。敏捷性を指標とした反復横とびの測定値は、1年生:32.43 ± 1.90回, 2年生:34 ± 9.17回, 3年生:37.83 ± 3.82回, 4年生:41.33 ± 4.68回, 5年生:44.86 ± 5.96回, 6年生:44.33 ± 5.94回であり、すべての学年の測定値において、全国および広島県の平均値を上回る結果を示した。スピード（走力）を指標とした50m走の測定値は、

1年生:12.27 ± 0.77秒, 2年生:11.94 ± 2.63秒, 3年生:10.98 ± 1.17秒, 4年生:10.45 ± 1.39秒, 5年生:9.51 ± 0.59秒, 6年生:9.20 ± 0.78秒であり、1～4・6年生の測定値において全国および広島県の平均値を上回り、5年生の測定値が広島県の平均値を上回る結果を示した。さらにその他の測定項目でも、多数の学年で全国または広島県の平均値を上回る結果が示された。

2. 児童の生活状況と体力との関連

2.1. 住居状況および通学状況

島の児童における住居状況を調査した結果、階段を利用したアパートに住む児童は1名であり、他の児童は全て一軒家に住んでいることがわかった。また、通学状況を確認したところ、スクールバスを利用している児童がほとんどであり、その他の児童は徒歩での通学であった。バス所要時間は平均9.6分（SD=1.1）であり、徒歩で通学する児童の通学時間は平均9.7分（SD=10.7）であった。徒歩で通学する児童の中には50分をかけて

表2 新体力テストにおける島嶼部児童の測定結果と全国小学生自働および広島県小学生児童の平均値との比較

| 学年 | 平均 | 握力 (kg) | 上体起こし (回) | 長座体前屈 (cm) | 反復横とび (点) | 20mシャトルラン (回) | 50m走 (秒) | 立ち幅とび (cm) | ボール投げ (m) |
|----|-----|------------|--------------|---------------|--------------|------------------|-------------|---------------|--------------|
| 1 | 全国 | 9.31 | 10.85* | 27.4* | 25.85* | 15.38 | 11.83* | 110.89 | 7.57 |
| | 広島県 | 8.72 | 11.32 | 26.05** | 24.3** | 14.11** | 11.89** | 111 | 7.37 |
| | 島嶼部 | 8±1.63 | 10.86±3.63 | 31.71±3.40 | 32.43±1.90 | 14.29±6.24 | 12.27±0.77 | 110±17.75 | 7.29±2.36 |
| 2 | 全国 | 10.67 | 13.21* | 28.42* | 29.9* | 23.13 | 10.96* | 122.79* | 10.58* |
| | 広島県 | 10.55 | 13.09** | 27.81** | 28.23** | 21.43 | 11.02** | 120.61** | 10.36** |
| | 島嶼部 | 10.2±1.30 | 14±4.06 | 32.4±3.36 | 34±9.17 | 17.8±7.46 | 11.94±2.63 | 123.4±28.16 | 12.2±7.66 |
| 3 | 全国 | 12.55* | 14.71* | 30.91* | 33.31* | 29.2 | 10.36* | 132.01 | 13.69* |
| | 広島県 | 12.22** | 14.88** | 30.01** | 32.17** | 29 | 10.41** | 130.92 | 13.67** |
| | 島嶼部 | 14±3.58 | 16.17±3.13 | 35.67±2.42 | 37.83±3.82 | 23.5±12.14 | 10.98±1.17 | 124.17±15.69 | 14±3.95 |
| 4 | 全国 | 14.47 | 16.55 | 32.49* | 36.8* | 36.98 | 9.9* | 141.3* | 17.08* |
| | 広島県 | 14.31 | 16.91 | 31.43** | 36.49** | 35.72 | 9.93** | 140.67** | 17.43** |
| | 島嶼部 | 14.17±3.87 | 15.5±4.46 | 34.83±11.82 | 41.33±4.68 | 33.5±8.98 | 10.45±1.39 | 142.83±13.56 | 18±9.23 |
| 5 | 全国 | 16.98 | 18.76* | 34.02* | 40.67* | 45.57* | 9.45* | 151.25* | 20.79 |
| | 広島県 | 16.49** | 18.81** | 34.2** | 40.35** | 44.1** | 9.53 | 149.74** | 20.56 |
| | 島嶼部 | 16.88±4.45 | 21.86±3.72 | 37.75±5.06 | 44.86±5.96 | 48.13±11.90 | 9.51±0.59 | 152.25±13.06 | 18.75±6.67 |
| 6 | 全国 | 19.96* | 20.19 | 36.76 | 43.6* | 54.08* | 9.05* | 161.01* | 23.67* |
| | 広島県 | 19.48** | 19.87** | 36.24** | 42.81** | 50.05** | 9.13** | 158.64** | 23.63** |
| | 島嶼部 | 22.89±6.47 | 20.11±8.52 | 36.67±11.68 | 44.33±5.94 | 55.44±13.59 | 9.2±0.78 | 164.22±16.41 | 25.89±10.94 |

通学している児童もいることから、スクールパスのルートから外れた地域にも家があることが示唆され、学校域が広範囲であることが伺われた。

2.2. 日常の運動状況

島の児童における放課後の運動状況を調査した結果、15名（32%）の児童が放課後に「よく運動をしている」ことがわかった。さらに、その他の27名（57%）の児童が「時々または少し運動をしている」と答えていることから、42名（89%）の児童が放課後になんらかの運動をしていることがわかった。また、休日における運動状況の調査では、22名（47%）の児童が休日に「よく運動をしている」ことがわかり、その他の23名（49%）児童が「時々または少し運動をしている」と答えていることから、ほぼ全員（45名：96%）が休日になんらかの運動をしていることが伺われた。

2.3. スポーツクラブの活動状況

児童におけるスポーツクラブの加入状況を調査した結果、29名（62%）の児童が運動系のクラブに所属していることがわかった。そのほとんどは地元のバレーボールチームに所属していた。さらに、スポーツクラブへの加入時期は8.4歳（SD=1.9）であり、頻度は週に2.1回（SD=1.0）

という結果が示された。

2.4. 体力と学年との関係

新体力テストにおける体力総合得点の平均は48.7点（SD = 13.9）であった。体力総合得点に関して学年との相関を検討した結果、1%水準で有意な正の相関がみられた（ $r=.812$ ）。低学年のうちは体力得点が低いものの、学年が進むにつれてそれが向上していく様子が伺えた。

2.5. 体力とクラブの活動頻度との関係

体力総合得点とスポーツクラブの活動頻度との間には5%水準で有意な正の相関がみられた（ $r=.430$ ）。

2.6. 体力とクラブ加入の有無との関係

表3に、スポーツクラブ加入の有無と各体力測定項目の平均得点との関係を示した。マンホイットニーのU検定で分析した結果、上体起こし・反復横とび・20Mシャトルラン・ハンドボール投げの4項目において5%水準の有意差が示され、50M走で10%水準の有意傾向が示された。

3. 児童の運動意識と体力との関連

アクティビティ尺度（15項目、4段階評定、得点15～60）を児童用書き換え、児童の運動意識を検討した結果、平均43.2点（SD = 10.8）

表3 スポーツクラブ加入の有無と各体力測定項目の平均得点との比較

| | 握力 | 上体起こし | 長座体前屈 | 反復横とび | 20mシャトルラン | 50m走 | 立ち幅跳び | ボール投げ |
|------|------|--------|-------|--------|-----------|-------|-------|-------|
| 加入群 | 22 | 25.9** | 23** | 25.4** | 25.2** | 23.9* | 23 | 25 |
| 無加入群 | 19.7 | 14.2 | 18.1 | 14.8 | 15.2 | 16.9 | 18.2 | 15.4 |

表4 体力測定各項目の平均得点におけるアクティビティ高低群間の比較

| | 握力 | 上体起こし | 長座体前屈 | 反復横とび | 20mシャトルラン | 50m走 | 立ち幅跳び | ボール投げ |
|----|-------|-------|-------|-------|-----------|------|-------|-------|
| 高群 | 17.6* | 20.1 | 19.8 | 19.2 | 18.2 | 18.5 | 18.7 | 20 |
| 低群 | 24.2 | 21.9 | 22.2 | 22.8 | 23.7 | 23.4 | 23.2 | 22 |

表5 体力高低群およびアクティビティ高低群の内訳

| | アクティビティ高群 | アクティビティ低群 |
|------|-----------|-----------|
| 体力高群 | 9 | 12 |
| 体力低群 | 11 | 9 |

であった。

3.1. 体力測定各項目とアクティビティ尺度の関係

表4に、体力測定各項目の平均点におけるアクティビティ尺度高低群間の比較を示した。体力測定得点の平均とアクティビティ尺度得点との関連を検討した。その際、アクティビティ尺度得点に関して、平均点(43.2点)より高い得点を示す児童のグループをアクティビティ高群(以下:アクティビティ高群)、平均点より低い得点を示す児童のグループをアクティビティ低群(以下:アクティビティ低群)として、2群間をU検定で分析した結果、握力に関してのみ10%水準で有意傾向がみられた。

3.2. 体力とアクティビティ尺度との関係

表5に、体力高低群およびアクティビティ高低群の内訳を示した。体力得点に関しては平均点(48.7点)より高い得点を示す児童のグループを体力高群(以下:体力高群)、平均より低い得点を示す児童のグループを体力低群(以下:体力低群)とした。運動意識が高いものの、体力が低い状態にある児童が11名であった。なお、この11名のうち8名が低学年であった。一方、体力が高い状態にも関わらず、運動意識が低い児童が12名であった。なお、この12名のうち11名が高学年であった。これは島の生活というものが、運動意識の強弱とは無関係に体力を培っていく傾向があるものと考えられる。

IV. 考 察

1. 島嶼部小学校の児童における新体力テストの結果について

新体力テスト測定における全国平均値および広島県平均値と島嶼部児童との平均値を比較したところ、2年生以上の学年において、ほとんど(2/3:約65%)の測定項目で平均値を上回っていることが分かった。広島県全体としては全国平均を下回る結果にあるにもかかわらず、本研究の対象島嶼部では、平均を大きく上回っていた。都道府県別の特色ではなく、島嶼部特有の結果であると考えられる。宗高ら¹⁵⁾は、幼児の運動能力の地域差に関する研究の中で、運動能力において、離島は団地・都市よりも運動協調能力や柔軟能力に優れていたことを報告していることから、本研究の結果は先行研究を支持するものと示唆される。

さらに、5・6年生において20mシャトルランの記録が高い値を示していることにも注目したい。丸山ら¹⁷⁾は、離島における児童の有酸素能力は、同年代の児童に比べて高かったと報告している。島嶼部S小学校は離島にある小学校と同様に、近い海岸に面した広い校庭を所有しており、校庭のみならず、海岸や山での自由な活動(運動遊び)が多いことから、体力・運動能力が維持・促進されていると考えられる。

2. 生活状況と体力との関係

3年生頃から運動系クラブを始める児童が多いという結果が示された。なお、新体力テストにおける体力総合得点平均値と学年との相関を検討したところ、1%水準で有意な正の相関がみられ($r=.812$)、3年生ごろから総合得点50点を超える児童がみられている。つまり学年が上がるにつれて、体力が向上すること、その際にスポーツクラブの加入が、なんらかの形で関連していることが考えられた。

さらに、体力総合得点とスポーツクラブの活動頻度との間には5%水準で有意な正の相関がみられた($r=.430$)ことから、スポーツクラブ加入の有無と体力の詳しい関連を検討するため、スポーツクラブ加入群と無加入群における各体力測定項目の平均得点との関連をマンホイットニーのU検定を行った。その結果、上体起こし・反復横と

び・20M シャトルラン・ボール投げの4項目において5%水準の有意差が示され、また50M走で10%水準の有意傾向が示されたことから、スポーツクラブに加入している児童は、体力要素における柔軟性・敏捷性・走、投能力・全身持久力が高い傾向にあることが考えられる。先行研究によると、運動習慣と体力の関係は明らかであり、運動部で活動している者や運動の頻度や時間の多い者の体力は、高い水準にある¹⁸⁾と言われていることから、スポーツクラブの活動頻度が向上すれば、それだけ体力の総合得点が上昇する傾向にあると考えられる。加えて河合¹⁸⁾は、体力を高めるためには生活の中に運動やスポーツを積極的に取り入れることが望ましいと報告している。当学校は、中学年以上で運動系クラブの活動が盛んであった。日常的な運動活動に加え、意図的にスポーツクラブで運動したことによって相乗効果を生み、体力および運動能力が向上したと考えられる。

3. 運動意識と体力との関係

島嶼部小学校児童の運動意識と体力の関係を検討するため、アクティビティ尺度の得点と体力総合得点との関連を分析した。その結果、アクティビティ得点と体力総合得点との間に有意な相関はみられなかった。しかし、体力測定の種類によっては運動意識に左右されるものがあることが予想されるため、体力測定各項目の平均点とアクティビティ尺度高低群間の比較を行った。2群に関する各体力測定得点のU検定を行った結果、握力に関してのみ10%水準で有意傾向が示された。ここでは有意差の有無に関わらず、アクティビティ高群よりもアクティビティ低群の方が、すべての体力測定項目で高い値を示したことに注目したい。この結果は、自らの運動意識は高いものの、それに基礎体力が伴っていない児童が存在するということが考えられる。体力高低群およびアクティビティ高低群の内訳を比較しても、運動意識が高いものの体力が低い8名の低学年と、体力が高い状態にも関わらず運動意識が低い11名の

高学年という、いわゆる意識と実際の体力との関係がアンバランスな児童がいることが示された。

これらの結果から、諸島部小学校の低学年児童は、体力がないことへの自覚は少ないが、体を動かすことに対して意欲的であることが考えられた。また高学年では、体力があるにも関わらず、体を動かすことに対して意欲的ではないことが示唆された。先行研究によると、運動能力的な要素が多く含まれる体力因子には運動・スポーツに対する積極的な意識が負の関連を認めていることから、積極的な意識を持つ者ほど体力は低い¹⁹⁾ことや、高学年児童において運動有能感は低下傾向を示した¹⁰⁾などの報告があることから、本研究の結果は先行研究を支持する結果となった。

今後、運動意識と体力のアンバランスが、後の体力維持行動にどのように影響を及ぼすのかを検討するとともに、運動意識の高まりにあわせて周囲の大人たちが運動環境をいかに整えるべきなのかを再考していく必要があるだろう。

V. 総 括

本研究は、広島県島嶼部のS小学校1～6年生の児童47名を対象に、体力・運動能力と日常生活活動およびアクティビティ意識との関連を検討し、新体力テストで測定された項目のうち、どの項目が児童の生活・運動習慣、アクティビティ意識に関連性があるかを探ることを目的とした。その結果を以下のようにまとめる。

- 1) 新体力テスト測定における全国平均値および広島県平均値と島嶼部児童との平均値を比較した結果、2年生以上の学年において、ほとんどの測定項目で平均値を上回った。広島県全体としては全国平均を下回る結果にあるにもかかわらず、本研究の対象島嶼部では、平均を大きく上回っていた。
- 2) スポーツクラブに加入している児童は、体力要素における柔軟性・敏捷性・走、投能力・全身持久力が高い傾向にあることが示唆された。

3) 島嶼部小学校の低学年児童は、体力がないことへの自覚は少ないが、体を動かすことに対して意欲的であることが考えられた。また高学年では、体力があるにも関わらず、体を動かすことに対して意欲的ではないことが示唆された。

以上のことから、島嶼部に特別な生活状況、およびそれに伴う体力の変化はみられなかったものの、地域の運動推奨状況（地元バレーボール団体など）が子どもたちの体力を向上させていることが考えられた。この地域は、毎年、地域住民全員による運動会が行われるなど、地域全体に運動推奨状況の特殊性が垣間見られる。交通機関が発展した現代において、生活状況には大きな違いはみられず、むしろ、地域における運動意識の高さ、運動活動の推奨状況が、地域住民の体力向上に大きく関連していると考えられる。

しかし、本研究の結果において、全国平均を上回る突出した体力があるにもかかわらず、運動意識が低い児童がいたこと、そしてそのアンバランスさには年齢による質的な違いがあったことにもまた注目すべきである。これまで多くの研究において検討されてきた運動有能感や原因帰属は重要な運動に対する動機付けであり、高学年の体力に関連する要因は運動量よりも積極的な内発的動機付けがより大きな意義を持つ¹⁹⁾。たとえ、地域の運動推奨状況があったとしても、必ずしも体力の向上とともに運動意識が高まるとは限らない。生涯にわたり健康運動を続けるためにも、今後生活状況の違いにとらわれることなく、運動意識の向上、特に運動に対する内発的動機付けを軸として、年齢別の運動環境のあり方、運動技能との関連を再考していく必要があるだろう。

VI. 参考文献

- 1) 宮元章次, 日高久美子, 2003, 宮崎公立大学生の体格・体力の推移について, 宮崎公立大学人文学部紀要, 第12巻, (1), pp.271-288.
- 2) 脇田裕久, 1997, 子どもの「体力・運動能力」から、体育科教育, 第10巻, pp.26-29.
- 3) 高井和夫, 2005, 子どもの身体活動を支える要因とその方策, 文教大学教育学部紀要, 第39集, pp.43-50.
- 4) 西嶋尚彦, 2002, 子どもの体力低下要因とその対策, 体育科教育, 第50巻(4), pp.15-21.
- 5) 今井佐恵子, 2002, 森鷗外と福沢諭吉の食生活, 京都短期大学論集, 第30巻(1), pp.17-24.
- 6) 水津久美子, 穴井恭子, 中村さゆり, 山本真弓, 2005, 児童の食生活に関する実態との関連について - 児童の元気創造を目指して -, 山口県立大学生生活科学部研究報告, 第31号, pp.29-40.
- 7) 間宮貴代子, 中野米子, 酒井映子, 間瀬智子, 田中真理子, 森圭子, 熊沢昭子, 1984, 幼児の身体発達に影響を及ぼす要因の研究, 名古屋女子大学紀要, 第30巻, pp.21-29.
- 8) 安部恵子, 2007, 小学校低学年児童の身体活動量に関する一考察, プール学院大学研究紀要, 第47号, pp.125-138.
- 9) 賀川昌明, 横田直樹, 2003, 小学校高学年児童の自尊感情と体育授業における価値観及び運動有能感との関連, 鳴門教育大学研究紀要(生活・健康編), 第18巻, pp.9-17.
- 10) 武田正司, 2005, 児童における体力と運動有能感との関係, 盛岡大学紀要, 第22巻, 41-47.
- 11) 鈴木裕子, 鈴木英樹, 上地広昭, 幼児の身体活動評価尺度の開発 - 子どもアクティビティ尺度 -, 体育学研究, 第50巻, pp.557-568, 2005.
- 12) 安孫子友行, 1990, 児童の運動意識の変容にかかわる心理的特性の研究(第1報), 日本体育学会大会号, 第41巻(A).
- 13) 安孫子友行, 1991, 児童の運動意識の変容にかかわる心理的特性の研究(第2報), 日本体育学会大会号, 第42巻(A).
- 14) 安孫子友行, 1992, 児童の運動意識の変容にかかわる心理的特性の研究(第3報), 日本体育学会大会号, 第43巻(A).
- 15) 宗高弘子, 松浦義行, 宗高平八, 2009, 幼児の運動能力の地域差について - 離島・団地・都市の場合 -, 体育学研究, 第16巻(2), pp.91-97.

- 16) 財団法人健康・体力づくり事業財団, 2009, 健康運動実践指導者養成用テキスト, 南江堂, pp.69-84.
- 17) 丸山敦夫, 晴永清道, 竹下公博, 2007, 離島複式学級における児童の体格・体力と体育授業の活動量について, 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 特別号 3 号, pp.87-95.
- 18) 河合勇治, 2000, 新体力テストから見た本校生徒の体力について, 名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要, 第 45 集, pp.183-189.
- 19) 小林秀昭, 小澤治夫, 樽谷将志, 2006, 児童の体格・体力と生活状況との関連, 北海道教育大学釧路校研究紀要, 第 38 号, pp.113-118.